

続 有恒教授を偲んで

塩 田 芳 久

「よく学び、よく遊べ」という言葉は子どもの頃からよくきかされたものである。しかし、この言葉のほとんどの意味を教えてくれたのは、ほかならぬ続先生であった。「よく学び」はともかくとして、「よく遊べ」のむづかしさとその大切さを身をもって続先生は教えてくださったのである。人間の本来の姿は“遊び“の中にこそあれ、勉めて強いる“勉強“や何かのための“学び“などの中にはけっしてない。“遊び“に徹しきれないような人間にほんとうの意味の“学び“などできるものではない。続先生は身をもってわたしたちに、こう教えてくださったのである。

新進気鋭の若手プロフェッサーとして続先生がこの教育心理学教室に着任されたのは、昭和27年の秋も深い頃であったように記憶している。それから昨年9月急逝されるまでの約20年間、続先生がいかに多くの秀れた仕事をされたかは万人の認めるところであろう。頭脳明晰で記憶力抜群、先生が手帖などを開いているのを見かけたことは殆んどない。そのうえ、アイデアが豊富で段取りがよいときているので、どんな仕事でもまことに手際よくかたづけられた。先生ほど仕事のできた人はそう多くはあるまい。

こうした先生の仕事ぶりの秘密が、実は「よく学び、よく遊べ」にあったことを知ったのは暫くたってからであった。ただ頭がよかったり、段取りがよいというだけでは、あのように仕事ができるものではない。先生にとっては仕事は仕事ではなく遊びであり、それ自身の中に無上の悦びとやり甲斐を感じておられたのであろう。「仕事すなわち遊び、遊びすなわち仕事」これが先生の心境ではなかったかと思われる。

「遊びすなわち仕事」という続先生の教えは、すくなくともわたくしにとってはこの上もなく貴重なものであった。イジイジした遊びほど有害無益なものはない。遊ぶなら徹底して遊ばねばならない。そこにこそ本物の人間関係があり、人と人との深い交わりと強い結びつきがある。これこそわれわれ心理学研究者にとっては何ものにもかえ難い貴重な体験である。かくて、続先生の発想になる「遊びすなわち仕事」ともいうべき多彩な教室の行事が生み出された。一週間に一度の教室会食。年に一度のアーベントに野外演習。忘年会や忘学年度会。ほかではあまり見られない家族同伴の親睦会。京都大学との交歓会。ちょっと変わったところでは毎週土曜日(夏遊)にアマダクジをつくってビヤホールに飲みに行く土

曜会。学会出張の機会をとらえた教室旅行。まだこのほかにもアイデアに富んだいくつかのその都度行事がある。よく飲み、よく喋り、よく歌い、よく踊る。こうした中で教室メンバーの人間関係は弥がうえにも高まり、いわゆるメンテナンス効果はまさに100%をこえるものであった。このような人間関係を基盤とした教室の仕事ぶりも、続先生を中心として、メンバーの一人であるわたしがいうのもいささか気がひけるが、まことに活発で楽しいものであった。つまり、教室のパフォーマンス機能もまた素晴らしく、社会集団の生産性を最大にすることを狙った三隅さんのPM論を、続先生はこのとき早くも実践されていたのである。依田先生をチーフとし、続先生を参謀格とした名大教育心理学教室のこうした活発な研究活動は、多くの人々の注目を集めたものである。

こうして過ぎし日のことを顧みるとき、わが畏友続教授の偉大さと、われわれ教室メンバーのために残された数々の遺産とには、いまさらながら感歎と感謝の念を深くするのである。ほんとうに惜みてもあまりある人物を失ったものである。

続先生は仕事の虫であり、研究の鬼であるとよくいわれた。確かにそのとおりである。何事にも徹するというのが先生の身上で、中途半端なことを嫌われた。生来愚鈍なわたくしなどは、何事も中途半端で徹しきれず、先生にいろいろと大変ご迷惑をおかけしたことを申しわけなく思っている。

十数年前の第7回卒業生の謝恩会の席上で、若し教室の先生方が他の職業に就いていたとすれば、それはどのような職業だろうか、その答えとして、続先生は大学病院の外科医ということであった。どのような事態に対しても常に冷静で判断を誤らず、緻密な計画のもとにテキパキと処理する。学生たちの眼には、何かしら近寄りやすい“こわい“先生と映ったのであろう。物事の筋道を大切に、几帳面で曲ったことの嫌いな先生は、学生にとっては、また“きびしい“先生ともみえたであろう。

このように続先生は、研究の鬼であり、仕事の虫であって、学生にとっては、近寄りやすい“こわい““きびしい“先生であったかもしれない。しかし、それは先生の“よく学ぶ“というパフォーマンスの半面だけをみただけであって、先生のもう一つの“よく遊ぶ“というメンテナンスの面を見落している。

先生は実によく飲まれた。芯から般若湯がお好きだったのである。飲むほどに酔うほどに歌が出、踊りがとび

出す。なかでも北原白秋の“からたちの花”と“桃太郎の鬼が島征伐の踊り”は絶品であった。桃太郎の踊りは、いつかは先生にぜひ教授していただきたいと思っていたのだが、まことに残念なことである。先生は、また豊かな趣味をもっておられた。音楽に、スポーツに、囲碁に、書道に、絵画に、8ミリ撮影に、そしてこれはもう芸は身を助けるほどのレベルだとうかがっていたピアノの調律……とそのレパートリーは頗る広がった。

続先生にはこのように人間味溢れたところがあり、仕事や研究一点張りの堅人ではけっしてなかった。他人の面倒もよくみられ、学生や卒業生の就職のために得意の車を駆って遠くまで出かけられることもしばしばであっ

た。また教室メンバーの一身上のことにも細かく気を配ってくださり、何かとよく相談にのってくださった。続先生はこのように人情にも厚いひとであった。

まだまだ続先生の思い出はつきないが、この辺で、わたしども教室のメンバーで、続先生の残された数々の貴重な研究業績を続有恒教授撰集として上梓したいと準備していることをご報告するとともに、先生につくってくださった“よく学び、よく遊べ”のこの教室のよき伝統をいついつまで受け継いでいくことを申し上げて筆を擱きたい。

最後に続先生のご冥福を心からお祈り申し上げます。

(昭和48年3月10日)